



「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」実践の意義と課題：「のびやかスペースあーち」利用実態調査単純集計からの考察

津田, 英二
伊藤, 篤
寺村, ゆかの
井手, 良徳

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 5(2):173-185

(Issue Date)

2012-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81003915>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003915>



「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」実践の意義と課題 —「のびやかスペースあーち」利用実態調査単純集計からの考察—

Meanings and Challenges of the Practice for Building an Inclusive Community with
Child and Family Support as a Start: through the survey intended for
the consumers of a university satellite plant

津田英二*
Eiji TSUDA*

伊藤 篤**
Atsushi ITO**

寺村ゆかの***
Yukano TERAMURA***

井手良徳****
Yoshinori IDE****

要約: この論文は、利用者アンケートに基づいて、神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設「のびやかスペースあーち」(以下、「あーち」と略記)の総論的評価を行うことを目的としている。まず「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」という「あーち」の理念とその意義や背景について述べた後、利用者アンケートの単純集計結果の概要を示し、それらに基づいた考察を行った。利用者アンケートは、調査用紙を郵送にて送付し、無記名で回答してもらい、同封した封書で返送してもらった。対象者 2043 人に調査用紙を配布した結果、回答者は 544 人であり、回収率は 26.6%であった。調査結果として注目されることがらに以下のような点がある。「あーち」の利用動機は、子育て中の若い母親の「わが子のため」といった私的関心に基づく割合が高いが、「あーち」における他者との積極的な関わりなどによって、利用者たちの関心は公共的なものに対して開かれていき、それが「あーち」利用の満足にもつながっているといった利用者の変化の様子を読みとることができた。「あーち」利用の満足度は概して高かったが、「あーち」が社会参加の機会になったと捉えている利用者が少なかった点、利用者の大半が乳児と母親に限られていた点が、今後の課題として示された。

はじめに

神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設「のびやかスペースあーち」(以下、「あーち」と略記)は、開設準備委員会での討議を経て、「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」をコンセプトとして 2005 年度に開設された。

本論は「あーち」の実践について、利用者アンケート調査結果に基づいて総論的に評価しようとすることを目的としている。このアンケート調査は、「あーち」開設から約5年が経過した時点で、「あーち」のコンセプトがどこまで実現できているのか、またその意義や効果はどのようなものであるのかといったことを探るために行った、利用者への悉皆調査である。今回は、単純集計のみを用いた分析を行う。クロス集計等を伴う分析は別稿に委ねる。

ただし、「あーち」を総論的に評価するのは今回が初めての試みとなる。したがって、データ分析の前にコンセプトについての説明と考察を行っておきたい。「あーち」のコンセプトがどのような現代的・社会的意義をもっているのかということについて、改めて述べた上で調査データに関する記述を行うことにする。「あーち」は、〈子育て支援を契機とした共生のまちづくり〉というコンセプトの現代的・社会的意義 → 〈コンセプトに応じた実践〉 → 〈実践の評価〉

→ 〈コンセプトや実践方法等の理論的深化〉というサイクルを一貫して行う実践的研究のフィールドである。つまり、「あーち」では、常に「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」というコンセプトに立ち返り、その意義を問い続けることを自らに課している。

第1章では「あーち」をフィールドとした実践的研究の概要と現代的・社会的意義を述べ、第2章では利用者アンケート調査結果の概要を紹介し、第3章では調査結果の分析を行い、最後に全体の総括を行う。本論は、「あーち」の実践的研究や運営に関わった神戸大学教職員(経験者を含む)が共同で執筆する。論文の構想や全体のチェックを含めた研究全体の責任と管理は、伊藤と津田が行い、データ管理と集計は井手が担当した。第1章 1)は津田、2)は伊藤、第2章は井手、第3章 1)は寺村、2)は伊藤、3)は津田が執筆を担当した。また、執筆者全員がその他の部分を共同執筆した他、調査実務を分担し、構成や文章の確認を行った。

1 実践的研究の概要と意義

1) 実践的研究の背景

(1) 社会的排除とコミュニティ

データに関する記述に入る前に、「あーち」のコンセプトを「子育て支援を契機とした共生のまちづくり」と設定した社会的背景につ

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授

** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授

*** 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期課程

**** 大手前大学

(2011年9月30日 受付)
(2012年1月16日 受理)

いて論じる。私たちは大枠として、第一に社会的排除が深化する社会への危機意識があり、第二に子育てに関わる問題を扱う社会的要請が特に強いという意識があり、その2つは密接に関連しているという捉え方をしている。

まず私たちには、ことさら女性たちが孤独を感じながら子育てをしなければならないという社会状況に対する危機感があった。子育てが孤独な環境でなされる状況は、子育てという問題に止まらず、私たちが生活していく場における社会環境の閉塞性、特に人間と人間との関わり合いの問題が横たわっている。したがって、子育てについての問題をきっかけにしつつ、私たちの生活の場全体における社会的紐帯の欠如を問題にしようとしたのが、「あーち」のコンセプトといえよう。

こうした問題意識は、現在の多くの社会思想の中に顕著にみられる。特に社会的排除という語によって示される問題を論じることで、「あーち」のコンセプトの社会的背景がより明確になるように思われる。社会的排除は、政治的側面からのアプローチと社会的側面からのアプローチによって捉えられ、相互に密接に関連しあっている。政治的側面からみた社会的排除は、既存の制度を利用しない／できない人々を問題にする。したがって、政治的努力によってそれらの人々を制度的な枠組みに包摂することがめざされる(中村, 2002, pp.56-66)。社会的側面からみた社会的排除は、私たちの他者に対する態度に関連している。私たちは、基本的に他者に対して関心を払うことなく暮らす。相互に無関心な社会において、人々は孤独化していく。J.ヤングは、このような私たちの生きる後期近代社会を排除型社会と呼び、次のように述べる。

“後期近代社会では、差異や多様性はただちに無害化され、内部に取り込まれ、そして賞賛される。後期近代社会が受け容れないのは服従しない人々と危険な階級である。後期近代はこうした人々にたいして巧妙に防御壁を築こうとしているが、それはたんに体制の内と外に人々を分けるだけではなく、あらゆる人々のあいだに張り巡らされるのである。”(ヤング, 2007, pp.153-154)

さらにヤングは、こうした社会では、社会に起こる問題から自己を守る条件として、本質主義が活性化するという。すなわち、他者(あるいは自己)の属性をその他者(あるいは自己)の本質と捉え、自己と他者との間に深い隔たりをつくり出す。これによって他者に問題の責任をなすりつけることができるとして、次のように述べる。

“社会に問題が起こるのは、実際には、社会秩序そのもののなかに根本的な矛盾があるからなのだが、そう考えるのではなく、社会に問題が起こるのは問題そのもののせいだ、と考えるのである——つまり、「問題自体を取り除いてしまえば、社会から問題はなくなるんじゃないか!」というわけである。”(ヤング, 2007, pp.285-286)

このような社会的排除を2つのアプローチから捉えると、私たちの生活の場全体における社会的紐帯の欠如に働きかけようとする「あーち」の実践を次のように意味づけることができよう。

第一に、制度を活用できないために行き場を失っている人たちや広い意味での貧困に直面している人々を、既存の制度と結びつけていくという実践の意味づけである。あるいは、そうした人たちが活用できる制度自体をつくっていく実践という意味づけでもある。

第二に、無関心化させられていた他者を現前させることによって本質主義を乗り越えるという実践の意味づけである。

実際に行われている「あーち」の実践をこのような視点で意味づけることは難しくない。第一の意味づけでいえば、社会に行き場の少ない人々を主要なターゲットとした場づくりを意識的にしているし、そうした人々に対して既存の制度を活用するための相談等の実践にも取り組んでいる。また、第二の意味づけでいえば、生活の中で関わる機会がない人々同士が、「あーち」で否応なく関わる場面をつくるのが意識的に実践されてきている。そうした試みによって、自己とその他者との間に引いていた太い境界を徐々に薄れさせ、社会に起こる問題を他者の問題として片づけてしまう私たちの意識に楔を打とうとしているのである。

こうした意味づけは、「あーち」のコンセプトに含まれる「共生のまちづくり」に関連している。「まちづくり」という言葉によって、私たちは新たなコミュニティの形成を意識している。顔の見える関係、さらには相互に大切に思える関係を張り巡らせることによって、誰かを排除することのないコミュニティに向かって前進しようというイメージである。

しかし、一般的な傾向として、場としてのコミュニティには他者を同化させる力がある。すなわちコミュニティこそ政治的闘争の場だともいえる。コミュニティはどのような基準で他者を受け容れるかということが問題になるのである。したがって、コミュニティは他者を無害化する装置として機能する(Mayo, 2000, p.39)。「共生」という語が、マジョリティや権力者へのマイノリティや被抑圧者の同化を意味しているのであれば、「あーち」はかえって社会的に排除される人々を抑圧する装置として機能してしまう。

このリスクを回避するためには、「あーち」はコミュニティのもつ権力構造に対して常に意識をもって実践を展開することが求められる。その権力構造というのは、コミュニティで権力をもった人々とそうでない人々との関係の構造でもあるが、私たちが抱いている「普通の人たち」という観念とも関わっている。「異常な人々」を「普通の人たち」に同化させようとする意識が、他者への抑圧を構造化する。したがって、「あーち」における実践は、私たちの抱いている「普通」という観念に働きかけることを意識しなければならないということになる。私にとつての「普通」と他者にとつての「普通」の差異を受け容れ、その上で「共生」が実現するコミュニティが形成される。その過程では多くの葛藤が予期される。

このように、「あーち」のコンセプトには、社会に行き場の少ない人々と社会とのパイプをつくりだし、また多様な人々が葛藤を通して分かりあうことを通した「共生のまちづくり」の過程をつくりだそうとする期待が込められているのである。

(2) 子育て支援に関する実践的研究の背景

子育て支援は、少子対策とは切り離して考えられるべきであり、両者は独立に論じられる必要があると指摘されることもある。しかし、出生率減少の原因の一部には、第2次ベビーブーム(1971~74年)以降の親世代において、自らの人生設計のなかに、結婚・出産・育児を選択しない人々が確実に増加しているという事実(最低値1.26を記録した2005年まで合計特殊出生率が漸次的に低下し続けた点、第3次ベビーブームが生じなかった点など)があり(内閣府, 2010, p.12)、さらにその原因は、子育て支援が必要な背景とされる「孤立した育児」「育児に関する不安」と共通している。したがって、

子育て支援と少子対策とを完全に切り離すことはできない。しかし、エンゼルプラン、新エンゼルプラン、子ども・子育て応援プランなど、これまで実施されてきた狭い意味での子育て支援策だけでは出生率の回復に至らなかったことを考えれば、その回復を長期的かつ副次的目標と位置づけ直し、すべての子どもの健全な発達を中心的な目標に据えた総合的な家庭支援施策が必要である。このことは、現在、政府が検討している「子ども・子育て新システム」の審議経過およびその内容からもうかがえる。

このような、子どもの健全な発達を中心に据えた施策が必要であるということは、裏返して言えば、現代の子どもたちの健全な発達が十分に保障されていないことを示唆している。子どもにかかわる現代的課題として、子どもへの虐待やネグレクト、子どもの貧困、発達障害が招く2次障害、いじめ・不登校やひきこもり、アルコール・薬物中毒、睡眠や食などにかかわる不適切な生活習慣などが挙げられるが、これらは、子どもおよび子どもの育ちが大切にされていない結果として生じている現象である。英国政府は、その政策提言書 *Every Child Matters* (2003 年) において、社会全体で支援し保障すべき子どもの姿を、「子どもは健康である」「子どもは安全である」「子どもは楽しく物事を成し遂げる」「子どもは社会に貢献する」「経済的に安定する」の5点に集約しているが、これも裏を返せば、これらの面において英国の子どもの発達が保障されていないことの表れである。

近年、わが国では、社会の変化に影響を受けた親世代が、子どもの養育に必要な様々な知識・技能などを獲得しておらず、また、養育にかかわるソーシャル・サポートをタイミング良く適切に、あるいは気軽に得られない孤立した状態にあり、それが、子どもが安心・安全な環境のなかで健康に生きていくこと・楽しく遊んだり学んだりすることが十分に担保されない状況をもたらしていると言われる。換言すれば、親世代が、親として自信を獲得し・孤立から脱却し成長してけるようになることが喫緊の課題である。

このような課題を解決するための支援策のうち、リスク状況の如何にかかわらず、子育て家庭一般を対象とした予防的支援策（ユニバーサル・サービス）として、政府も1990年以降に子育て支援事業の一つとしてその拡充に力を入れてきた「つどいの広場事業（現在は、第2種福祉事業となり、地域子育て支援拠点事業と呼ばれる）」がある。ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの子ども・家庭支援部門は、次の項でその概要を紹介する大学サテライト施設において、この「地域子育て支援拠点事業（「あいち」ではドロップインと呼んでいる）」を基盤サービスと位置づけ、その他のサービスやプログラムと組み合わせるという方略のもと、「子育て家庭のエンパワメントを目指すファミリー・リソース・センターの構築」を目指した実践的研究をおこなっている。これは、広い意味では、子育て支援にかかわるサービスを大学が提供することの意味・意義を問うことであるが、本調査研究は、利用者からの評価を通して、この「ファミリー・リソース・センター」構築へ向けたプロセスの意味・意義を検討するための貴重な資料を得ることができると考える。

2) 「のびやかスペースあいち」の概要

「あいち」は、神戸大学大学院総合人間科学研究科（現人間発達環境学研究科）ヒューマン・コミュニティ創成研究センターが設立

の主体となり、旧灘区役所庁舎跡地（神戸市灘区神ノ木通）2階約350㎡に、2005年9月に開設した。この事業は、施設の老朽化に伴う灘区役所庁舎移転（2004年春）を契機に、神戸市と神戸大学とが協定を結び、協働で実践的研究・地域貢献の場を設立することに合意し、進めてきたものである。

2005年1月から懇談会を開催し、4月には設立準備委員会を発足させた。設立準備委員会には、神戸大学発達科学部の教員の他、灘区職員、地域でさまざまな活動を展開している市民が参加した。2005年9月の開設時から、連絡協議会と名称を変えて地域のプラットフォームとして機能している。

「あいち」は、設立準備委員会における議論を経て理念や施設概要などの枠組みを形成し、出発することになった。地域、行政、大学等のコラボレーションによって、子育て支援の各種プログラムを展開することを通して、特に孤立した生活を強いられている人たちの地域参加、社会参加を促していこうとする思いが反映された理念である。この理念の実現のために、「あいち」では設立当初から、住民、学生、教職員が、協力しあいながら多様なプログラムを実施している。乳幼児や保護者のためのプログラム、障がいに関わるプログラム、さまざまな人たちの交流を促進するプログラム、文化芸術のプログラムなどである。また、「あいち」創設以来、毎月「あいち通信」を欠かさず発行している。この通信も、住民、学生、教職員のコラボレーションで編集しており、時々地域情報や子育て情報などと同時に、「あいち」のプログラムを紹介している

「あいち」の空間は3つの部屋と1つのコーナーから構成されている。第一に、乳幼児を中心とした遊び場であり、「ふらっと・あいち」と呼ばれる。明るい雰囲気の中で、乳幼児が自由に遊び、親を含めた大人がそれをあたたかく見守る場として設置された。第二に主に造形活動を展開する部屋であり、「あーと・あいち」と呼ばれる。さまざまな画材に囲まれ、来場者が自由に造形活動を楽しむことができる場として設置された。アート系の各種ワークショップが開催されることが多い。第三に多目的室であり「こらぼ・あいち」と呼ばれる。さまざまな企画を展開するスペースで、講演会や座談会、教室、各種相談、音楽プログラム、ギャラリーなどに使われる。最後に情報コーナーであり、地域発・地域向けの情報が自動的に交換されるコーナーとして設置された

「あいち」は、こうした社会的意義の追求に加えて、これらを実践的研究に位置づける研究フィールドでもある。本論も「あいち」をフィールドとした実践的研究の一部に位置付くが、実践によって体感する社会に隠された問題をテーマとして取り上げ、理論化し、またそうした問題に対してさまざまな働きかけを実験的に展開することによって、その効果を分析していくといった研究がめざされている。これまでも「あいち」をフィールドとして実践的研究が行われてきた（本論末の〈「あいち」に関する主な文献〉に一覧を掲載）。また「あいち」は、実践的研究を行う学生を支援する教育的観点からも機能している。これまでのところ、毎年2〜3本のペースで「あいち」をフィールドとした卒業論文、修士論文が執筆されている。

2 利用者実態調査

1) 調査の概要

本調査では、開設満5年を迎えるにあたり、「のびやかスペース

あーち」が利用者にとってどのように役立ってきたのかを知り、さらに意義のある施設にする方法を模索することを目的とした。調査対象者は、「のびやかスペースあーち」のおやこ・おとな会員を対象とした。調査方法は、調査用紙を郵送にて送付し、無記名で回答してもらい、同封した封書で返送してもらった。対象者 2043 人に調査用紙を配布した結果、回答者は 544 人であり、回収率は 26.6%であった。このうち、10 歳代以下の回答者 4 人と、利用登録のみの回答者 1 人の合計 5 人を除き、539 人を有効回答数とした。有効回答率は 26.4%であった。調査内容は、(1)性別・年齢、(2)居住地、(3)立場、(4)境遇、(5)家族、(6)利用し始めた時期、(7)情報源、(8)利用の理由（利用前の関心度）、(9)利用後の満足度、(10)子どもの発達と利用との関係、(11)利用状況、(12)利用プログラム、(13)関心を深めた問題、(14)他の利用者との関わり、に関する質問を行った。なお、回答形式については、主に回答欄のあてはまる括弧内にチェックを入れる、またはあてはまる箇所には○を入れるように回答を求めた。調査時期は、2010 年 7 月から 8 月の間に実施した。

2) 調査結果の概要

(1) 性別・年齢

性別については、「女性」が 96.8% (514 人)、「男性」が 3.2% (17 人) であり、女性が大部分を占めている。年齢については、「30 歳代」が 60.5%と最も多く、次いで「40 歳代」が 23.0%、「20 歳代」が 12.1%、「50 歳代」が 1.9%、「60 歳代」が 1.3%、「70 歳代」が 0.8%、「80 歳代」が 0.4%となっている。このうち、「30 歳代」と「40 歳代」を合わせると、これらの年代が約 8 割を占めている。平均年齢は 36.7 歳（標準偏差 7.9）であった。この結果を Table1 に示す。

(2) 居住地

居住地については、約 8 割の利用者が「神戸市灘区」であり、それ以外の地域では、「神戸市東灘区」が 8.7%、「神戸市中央区」が 4.2%、「神戸市のその他の区」が 2.4%、「西宮市」が 1.5%、などとなっている。この結果を Table2 に示す。

(3) 立場

利用者の立場については、「子育て中の保護者」が 88.9%と最も多く、約 9 割を占めている。次いで「ボランティア」が 5.8%、「子どもだけが利用」が 5.6%、「プログラムのリーダー」が 2.1%、「相

Table1 年齢

	人数	割合(%)
20～29 歳	63	12.1
30～39 歳	315	60.5
40～49 歳	120	23.0
50～59 歳	10	1.9
60～69 歳	7	1.3
70～79 歳	4	0.8
80～89 歳	2	0.4
合計	521	100.0

Table2 居住地

	人数	割合(%)
神戸市灘区	418	78.9
神戸市東灘区	46	8.7
神戸市中央区	22	4.2
神戸市のその他の区	13	2.4
西宮市	8	1.5
その他	23	4.3
合計	530	100.0

談員」が 0.6%、などとなっている。この結果を Table3 に示す。

(4) 境遇

利用し始めた時の境遇については、「主婦・主夫」が 76.4%と最も多く、次いで「フルタイムの有職者」が 9.6%、「育児休職中」が 6.0%、「アルバイト等の従事者」が 5.6%、「学生」が 3.2%、「退職者」が 0.6%、などとなっている。この結果を Table4 に示す。

(5) 家族

利用したことのある、または現在も利用している家族については、「1 人目の子ども」が 87.1%、「2 人目の子ども」が 29.5%で、それぞれ約 9 割と約 3 割を占めている。また、「自分一人だけで利用」が 11.2%、回答者の「配偶者」が 13.2%であり、それぞれ 1 割を超えていたが、「3 人目の子ども」が 3.4%、「4 人目の子ども」が 0.4%、「子どもにとっても祖父」が 0.6%、「子どもにとっても祖母」が 3.0%となっており、それぞれの割合は小さかった。この結果を Table5 に示す。

(6) 利用し始めた時期

利用し始めた時期については、「2005 年」が 16.6%、「2006 年」が 15.8%、「2007 年」が 15.2%、「2008 年」が 21.2%、「2009 年」が 18.1%となっている。「2005 年」の利用期間は 4 か月のみであるが、5 年間の中では「2008 年」の割合が最も大きくなっている。2010 年では、調査を行った 8 月の時点での新たな利用者の割合は 11.2%であった。この結果を Table6 に示す。

また、利用し始めた時期における子どもの年齢については、1 人目では、「1 歳未満」が 30.0%、「1～2 歳未満」が 31.5%、「2～3 歳

Table3 立場

	人数	割合(%)
子育て中の保護者	474	88.9
ボランティア	31	5.8
子どもだけが利用	30	5.6
プログラムのリーダー	11	2.1
相談員	3	0.6
該当なし	13	2.4

注) 複数回答可。%は回答者 533 人に対する割合。

Table4 境遇

	人数	割合(%)
主婦、主夫	407	76.4
フルタイムの有職者	51	9.6
育児休職中	32	6.0
アルバイト等の従事者	30	5.6
学生	17	3.2
退職者	3	0.6
その他	12	2.3

注) 複数回答可。%は回答者 533 人に対する割合。

Table5 家族

	人数	割合(%)
自分一人だけで利用	59	11.2
配偶者	70	13.2
1 人目の子ども	461	87.1
2 人目の子ども	156	29.5
3 人目の子ども	18	3.4
4 人目の子ども	2	0.4
子どもにとっても祖父	3	0.6
子どもにとっても祖母	16	3.0

注) 複数回答可。%は回答者 529 人に対する割合。

Table6 利用し始めた時期

	人数	割合 (%)
2005 年	86	16.6
2006 年	82	15.8
2007 年	79	15.2
2008 年	110	21.2
2009 年	94	18.1
2010 年	58	11.2
不明	10	1.9
合計	519	100.0

Table7 利用し始めた時期

	人数	割合 (%)
1 人目 1 歳未満	161	30.0
1 人目 1～2 歳未満	169	31.5
1 人目 2～3 歳未満	32	6.0
1 人目 3～4 歳未満	21	3.9
1 人目 4～5 歳未満	13	2.4
1 人目 5～6 歳未満	12	2.2
1 人目 6 歳以上	29	5.4
2 人目 1 歳未満	14	2.6
2 人目 1～2 歳未満	10	1.9
2 人目 2～3 歳未満	2	0.4
2 人目 3～4 歳未満	1	0.2
2 人目 4～5 歳未満	2	0.4
2 人目 5～6 歳未満	1	0.2
2 人目 6 歳以上	7	1.3
3 人目 1～2 歳未満	1	0.2
3 人目 2～3 歳未満	1	0.2
3 人目 3～4 歳未満	2	0.4
3 人目幼稚園	1	0.2
その他	38	7.1
不明	19	3.5
合計	536	100.0

未満」が 6.0%、「3～4 歳未満」が 3.9%、「4～5 歳未満」が 2.4%、「5～6 歳未満」が 2.2%、「6 歳以上」が 5.4%であり、「1 歳未満」と「1～2 歳未満」を合わせると、これらの年齢で全体の約 6 割を占めている。2 人目では、「1 歳未満」が 2.6%、「1～2 歳未満」が 1.9%、「2～3 歳未満」が 0.4%、「3～4 歳未満」が 0.2%、「4～5 歳未満」が 0.4%、「5～6 歳未満」が 0.2%、「6 歳以上」が 1.5%であった。3 人目では、「1～2 歳未満」が 0.2%、「2～3 歳未満」が 0.2%、「3～4 歳未満」が 0.4%、「幼稚園」が 0.2%であった。この結果を Table7 に示す。

(7) 情報源

「あーち」を知った情報源については、「友人・知人」によるものが 41.2%と最も多く、約 4 割を占めている。次いで、「区役所」が 26.8%、「産婦人科クリニック」が 13.1%、「新生児訪問」が 9.7%、

Table8 情報源

	人数	割合 (%)
友人・知人	220	41.2
区役所	143	26.8
産婦人科クリニック	70	13.1
新生児訪問	52	9.7
ホームページ	39	7.3
児童館	30	5.6
子育てサークル	26	4.9
あーちの建物、看板等	25	4.7
家族・親戚	23	4.3
新聞等	15	2.8
先生等の紹介	13	2.4
ミクシー等のサイト	12	2.2
その他	32	6.0

注) 複数回答可。%は回答者 534 人に対する割合。

「ホームページ」が 7.3%、「児童館」が 5.6%、「子育てサークル」が 4.9%、「あーちの建物、看板等」が 4.7%、「家族・親戚」が 4.3%、「新聞等」が 2.8%、「先生等の紹介」が 2.4%、「ミクシー等のサイト」が 2.2%などとなっている。この結果を Table8 に示す。

(8) 利用の理由 (利用前の関心度)

「なぜ「あーち」を利用しようと思いましたか」という質問に対し、「子ども連れで長い時間過ごしたい」や「子どもの暮らしをよりよいものにしたい」等の 12 項目について、「よくあてはまる」(1 点)、「ややあてはまる」(2 点)、「あまりあてはまらない」(3 点)、「全くあてはまらない」(4 点)の 4 段階評定を設定し、最もあてはまる回答を求めた。各選択肢を選んだ人数と割合、得点の平均値と標準偏差 (SD) の結果を Table9 に示す。まず、4 段階評定のうち、「よくあてはまる」が最も多く選択された項目は、「子ども連れで楽しく遊びたい」「子どもの暮らしをよりよいものにしたい」「子育ての情報などを知りたい」「子どもの発達により」「子ども連れで長い時間過ごしたい」の 5 項目であった。また、4 段階評定のうち、「全くあてはまらない」が最も多く選択された項目は、「神戸大学の取り組みに関心がある」「アートや音楽などの文化活動に関心がある」「障がい児・者の支援に関心がある」の 3 項目であった。次に、得点の平均値をみると、1 点から 4 点までの間の中央の値である 2.5 点より低い項目 (すなわち、関心度が高い項目) は、「子ども連れで楽しく遊びたい」「子どもの暮らしをよりよいものにしたい」「子育ての情報などを知りたい」「子どもの発達により」「子ども連れで長い時間過ごしたい」「子育て支援に関心がある」「自分自身の友だちがほしい」「子育ての相談にのってもらいたい」の 8 項目であり、子育てに関わる項目が多かった。その一方、2.5 点より高い項目 (す

Table9 利用の理由(利用前の関心度)

	人数 (%)					得点の平均値と (SD)
	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	計	
子ども連れで楽しく遊びたい	344 (64.8)	116 (21.8)	32 (6.0)	39 (7.3)	531 (100.0)	1.56 (.90)
子どもの暮らしをよりよいものにしたい	240 (44.9)	209 (39.1)	55 (10.3)	31 (5.8)	535 (100.0)	1.77 (.86)
子育ての情報などを知りたい	235 (44.3)	197 (37.2)	64 (12.1)	34 (6.4)	530 (100.0)	1.81 (.89)
子どもの発達により	231 (43.2)	206 (38.5)	62 (11.6)	36 (6.7)	535 (100.0)	1.82 (.89)
子ども連れで長い時間過ごしたい	251 (47.2)	161 (30.3)	73 (13.7)	47 (8.8)	532 (100.0)	1.84 (.97)
子育て支援に関心がある	145 (27.3)	206 (38.7)	124 (23.3)	57 (10.7)	532 (100.0)	2.17 (.95)
自分自身の友だちがほしい	119 (22.5)	186 (35.1)	144 (27.2)	81 (15.3)	530 (100.0)	2.35 (.99)
子育ての相談にのってもらいたい	107 (20.0)	193 (36.1)	152 (28.5)	82 (15.4)	534 (100.0)	2.39 (.97)
神戸大学の取り組みに関心がある	42 (7.9)	131 (24.6)	169 (31.8)	190 (35.7)	532 (100.0)	2.95 (.96)
アートや音楽などの文化活動に関心がある	47 (8.8)	103 (19.3)	189 (35.4)	195 (36.5)	534 (100.0)	3.00 (.95)
社会参加がしたい	38 (7.1)	103 (19.3)	209 (39.2)	183 (34.3)	533 (100.0)	3.01 (.91)
障がい児・者の支援に関心がある	54 (10.2)	55 (10.4)	209 (39.4)	212 (40.0)	530 (100.0)	3.09 (.95)

Table10 利用後の満足度

	人数 (%)				計	得点の平均値と(SD)
	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない		
子ども連れで楽しく遊べた	363(74.5)	113 (23.2)	10 (2.1)	1 (0.2)	487 (100.0)	1.28(.51)
子ども連れで長い時間過ごせた	341(70.5)	118 (24.4)	22 (4.5)	3 (0.6)	484 (100.0)	1.35(.60)
子育ての情報などを得た	187(38.2)	219 (44.8)	69 (14.1)	14 (2.9)	489 (100.0)	1.82(.78)
人それぞれ子育ての悩みがあることがわかった	165 (33.7)	197 (40.2)	102 (20.8)	26 (5.3)	490 (100.0)	1.98(.87)
子どもの暮らしが豊かになった	134 (27.6)	247 (50.8)	87 (17.9)	18 (3.7)	486 (100.0)	1.98(.78)
子育ての仲間と知り合えた	171 (35.2)	161 (33.1)	126 (25.9)	28 (5.8)	486 (100.0)	2.02(.92)
さまざまな人と知り合えた	137 (26.8)	204 (39.8)	146 (28.5)	25 (4.9)	512 (100.0)	2.12(.86)
子どもの社会性が発達した	96 (19.9)	238 (49.4)	126 (26.1)	22 (4.6)	482 (100.0)	2.15(.79)
子育てのアドバイスをもらえた	135 (28.1)	156 (32.5)	147 (30.6)	42 (8.8)	480 (100.0)	2.20(.95)
視野が広がった	77 (15.3)	224 (44.4)	176 (34.9)	27 (5.4)	504 (100.0)	2.30(.79)
相談して気持ちが和らいだ	104 (21.6)	174 (36.2)	138 (28.7)	65 (13.5)	481 (100.0)	2.34(.96)
さまざまな人と相互理解が深まった	65 (12.8)	195 (38.3)	205 (40.3)	44 (8.6)	509 (100.0)	2.45(.82)
音楽やアートの文化活動を楽しめた	69 (15.6)	146 (33.0)	140 (31.6)	88 (19.9)	443 (100.0)	2.56(.98)
社会の役に立てた	22 (4.9)	59 (13.2)	224 (50.1)	142 (31.8)	447 (100.0)	3.09(.80)

Table11 子どもの発達と利用との関係

	人数	割合(%)
発達に順調である	426	87.7
障がいの判定を受けている	21	4.3
発達に問題があると感じた	15	3.1
発達に問題がある	13	2.7
答えたくない	1	0.2
その他	10	2.0
合計	486	100.0

なわち、関心度が低い項目)は、「神戸大学の取り組みに関心がある」「アートや音楽などの文化活動に関心がある」「社会参加がしたい」「障がい児・者の支援に関心がある」の4項目であった。

(9) 利用後の満足度

「「あーち」に通ったことで「よかった」と思うことはどういうことですか」という質問に対し、「子ども連れで楽しく遊べた」や「子ども連れで長い時間を過ごせた」等の14項目について、「よくあてはまる」(1点)、「ややあてはまる」(2点)、「あまりあてはまらない」(3点)、「全くあてはまらない」(4点)、「該当しない」、の5段階評定を設定し、最もあてはまる回答を求めた。「該当しない」を除く、各選択肢を選んだ人数と割合、得点の平均値と標準偏差(SD)の結果をTable10に示す。まず、4つの選択肢のうち、「よくあてはまる」が最も多く選択された項目は、「子ども連れで楽しく遊べた」「子ども連れで長い時間を過ごせた」「子育ての仲間と知り合えた」の3項目であった。次に、得点の平均値をみると、2.5点より低い項目(すなわち、満足度が高い項目)は、「子ども連れで楽しく遊べた」「子ども連れで長い時間を過ごせた」「子育ての情報などを得た」「人それぞれ子育ての悩みがあることを知った」「子どもの暮らしが豊かになった」「子育ての仲間と知り合えた」「さまざまな人と知り合えた」「子どもの社会性が発達した」「子育てのアドバイスをもらえた」「視野が広がった」「相談して気持ちが和らいだ」「さまざまな人と相互理解が深まった」の12項目であった。特に、平均値が2.0点以下の項目は、「子ども連れで楽しく遊べた」「子ども連れで長い時間を過ごせた」「子育ての情報などを得た」「人それぞれ子育ての悩みがあることを知った」「子どもの暮らしが豊かになった」の5項目であり、子育てに関わる項目であった。その一方、2.5点より高い項目(すなわち、満足度が低い項目)は、「音楽やアートなどの文化活動を楽しめた」「社会の役に立てた」の2項目であった。

(10) 子どもの発達と利用との関係

子どもの発達と利用との関係については、「発達に順調である」が87.7%であった。それ以外では、「障がいの判定を受けている」が4.3%、「発達に問題があると感じた」が3.1%、「発達に問題がある」が2.7%などとなっており、利用のある子どものうち、発達の問題と関わりがある子どもは約1割を占めている。この結果をTable11に示す。

(11) 利用状況

現在も利用している人は39.8%、以前は利用していたが現在利用していない人は60.2%であり、現在利用していない人は6割を占めている。さらに、現在利用していない理由をみると、「保育所、幼稚園に入園のため」が43.6%、「仕事や勉強で忙しいから」が20.9%、「小学校に入学のため」が15.0%、「引っ越ししたため」が11.2%、「成長して行きたがらないから」が10.3%、「就職・結婚のため」が9.3%、「遠方のため」が8.1%、「大きくなり周囲に迷惑になるから」が5.9%、「妊娠・出産のため」が3.1%、「外で遊ぶようになったから」が2.8%、「あり方に疑問を感じるから」が1.9%、「児童館に行くようになったから」が1.2%となっている。この結果をTable12に示す。「保育所、幼稚園に入園のため」「小学校に入学のため」「成長して行きたがらないから」「大きくなり周囲に迷惑になるから」「児童館に行くようになったから」の5項目の割合を合わせると76.0%になり、子どもの成長によって利用をやめる場合が多いことが示されている。

(12) 利用プログラム

利用したプログラムについては、利用者の約8割が「乳幼児と保

Table12 現在利用していない理由

	人数	割合(%)
保育所、幼稚園に入園のため	140	43.6
仕事や勉強で忙しいから	67	20.9
小学校に入学のため	48	15.0
引っ越ししたため	36	11.2
成長して行きたがらないから	33	10.3
就職・結婚のため	30	9.3
遠方のため	26	8.1
大きくなり周囲に迷惑になるから	19	5.9
妊娠・出産のため	10	3.1
外で遊ぶようになったから	9	2.8
あり方に疑問を感じるから	6	1.9
児童館に行くようになったから	4	1.2
その他	29	9.0

注) 複数回答可。%は回答者321人に対する割合。

「利用者向けプログラム」を利用している。それ以外のプログラムでは、利用者はいずれも4割以下となっている。この結果をTable13に示す。「乳幼児と保護者向けのプログラム」以外の利用したプログラムをみると、「音楽系プログラム」が33.9%、「利用者がリーダーのプログラム」が33.0%、「鑑賞(音楽や展示)プログラム」が24.6%、「アート系創作活動プログラム」が17.7%、「障がい児・者が中心のプログラム」が14.1%、「工作やお習字のプログラム」が12.0%、「親講座プログラム」が10.9%、「ダンス系プログラム」が9.9%、「保護者どうしの学習会プログラム」が4.6%、「「あーち」運営にかかわるプログラム」が3.8%、「その他のプログラム」が5.7%となっている。

(13) 関心を深めた問題

「あなた自身「あーち」で普段おしゃべりをしたり、プログラムに参加することで、それぞれの項目について、以前よりも興味をもてたと感じますか」という質問に対し、「子育てに関する問題」や「障がい児・者の支援」等の7項目について、「とても興味を深めた」(1点)、「やや興味を深めた」(2点)、「あまり興味を深めていない」(3点)、「全く興味を深めていない」(4点)の4段階評価を設定し、最もあてはまる回答を求めた。各選択肢を選んだ人数と割合、得点の平均値と標準偏差(SD)の結果をTable14に示す。まず、4段階評価のうち、「とても興味を深めた」が20%を超えた項目は「子育てに関する問題」「障がい児・者の支援」の2項目であったが、それ以外の「豊かに生活できる平和」「豊かに生活できるエコ」「女性の社会参加」「高齢者の支援」「青少年に関する問題」の5項目は、

それぞれ10%以下であった。次に、平均値が2.5点より低い項目(すなわち、興味を深めた項目)は、「子育てに関する問題」「障がい児・者の支援」の2項目であった。その一方、平均値が2.5点より高い項目(すなわち、興味を深めていない項目)は、「豊かに生活できるエコ」「女性の社会参加」「高齢者の支援」「青少年に関する問題」の4項目であった。

(14) 他の利用者との関わり

施設内における他の利用者との関わりにおいて、「知らない人から声をかけられるのはいやだ」「障がいのある子どもと一緒に遊ぶことに抵抗がある」「他人の悩みを聞いたりするのはいやだ」の3つの質問に対し、「よくあてはまる」(1点)、「ややあてはまる」(2点)、「あまりあてはまらない」(3点)、「全くあてはまらない」(4点)の4段階評価を設定し、最もあてはまる回答を求めた。各選択肢を選んだ人数と割合、得点の平均値と標準偏差(SD)の結果をTable15に示す。まず、「知らない人から声をかけられるのはいやだ」「障がいのある子どもと一緒に遊ぶことに抵抗がある」「他人の悩みを聞いたりするのはいやだ」の3項目全てにおいて、4段階評価のうち「全くあてはまらない」が最も多く選択されている。次に、平均値においても、3項目全てにおいて2.5点よりも高くなっている。これにより、施設内で、知らない人から声をかけられる、障がいのある子どもと一緒に遊ぶ、他人の悩みを聞く、ことに対する抵抗感が低いことが示されている。

3 調査結果からみる「あーち」の意義と課題

1) 利用者の属性についての考察

調査結果からも明らかのように、「あーち」の利用者のほとんどが女性(約97%)である。また、利用者の年齢分布は20代から80代まで幅広い。その内訳に着目すると、50代～80代のシニア世代は非常に少なく(合計5%未満)、利用が最も多いのは30代(約60%)、次いで40代、20代の順である。このように、「30代の女性」が利用者の中心であるということは、「あーち」が提供するサービスのひとつ(ドロップ・イン)が、地域子育て支援拠点事業であることと深く関連していると思われる。最近の厚生労働省の報告(ホームページ)によると、2008年における平均初婚年齢は男性30.2歳・女性28.5歳、また、2009年における母親の第一子出産平均年齢は29.7歳となっている。ここから、現在、乳幼児を育てている父母の年齢は30代が中心となってくることが分かる。さらに、斉藤(2008)

Table13 利用プログラム

	人数	割合(%)
乳幼児と保護者向け	438	83.4
音楽系	178	33.9
利用者がリーダー	173	33.0
鑑賞(音楽や展示)	129	24.6
アート系創作活動	93	17.7
障がい児・者が中心	74	14.1
工作やお習字	63	12.0
親講座	57	10.9
ダンス系	52	9.9
保護者どうしの学習会	24	4.6
「あーち」運営	20	3.8
その他	30	5.7

注) 複数回答可。%は回答者525人に対する割合。

Table14 関心を深めた問題

	人数 (%)				計	得点の平均値と(SD)
	とても興味を深めた	やや興味を深めた	あまり興味を深めていない	全く興味を深めていない		
子育てに関する問題	103 (20.5)	220 (43.8)	123 (24.5)	56 (11.2)	502 (100.0)	2.26 (.91)
障がい児・者の支援	101 (20.2)	192 (38.3)	143 (28.5)	65 (13.0)	501 (100.0)	2.34 (.94)
豊かに生活できる平和	53 (10.6)	211 (42.3)	169 (33.9)	66 (13.2)	499 (100.0)	2.50 (.85)
女性の社会参加	54 (10.8)	173 (34.5)	196 (39.1)	78 (15.6)	501 (100.0)	2.59 (.88)
豊かに生活できるエコ	39 (7.8)	164 (33.0)	213 (42.9)	81 (16.3)	497 (100.0)	2.68 (.84)
青少年に関する問題	42 (8.4)	134 (26.9)	218 (43.8)	104 (20.9)	498 (100.0)	2.77 (.87)
高齢者の支援	38 (7.6)	123 (24.7)	228 (45.8)	109 (21.9)	498 (100.0)	2.82 (.86)

Table15 他の利用者との関わり

	人数 (%)				計	得点の平均値と(SD)
	よくあてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない		
障がいのある子どもと一緒に遊ぶことに抵抗がある	1 (0.2)	23 (4.4)	182 (34.7)	319 (60.8)	525 (100.0)	3.56 (.59)
他人の悩みを聞いたりするのはいやだ	2 (0.4)	13 (2.5)	195 (37.2)	314 (59.9)	524 (100.0)	3.57 (.56)
知らない人から声をかけられるのはいやだ	0 (0.0)	4 (0.8)	168 (32.1)	352 (67.2)	524 (100.0)	3.66 (.49)

による比較的大規模な調査（対象が5都道府県において「ひろば」を利用する女性1,223人）における利用者の年代も30代が68.4%となっており、本調査の結果とほぼ同様である。以上のことから、本調査の回答者は、少なくとも年齢という観点からは、現在、子育て支援の主な対象とされている乳幼児を育てている女性を適切に代表する標本であると言える。

居住地については「あーち」が灘区のほぼ中央に位置しているため、同区に居住する利用者が回答者全体の約80%を占めている。次に多い利用者は、灘区の東隣（東灘区）と西隣（中央区）からの住民であり、これら3つの区の回答者を合計すると、全体の90%を超える。「あーち」には駐車場がなく、最寄りの駅（阪急・JR・阪神）いずれから徒歩で15分～20分かかることを考えれば、この結果は当然である。「あーち」は、主に灘区という比較的広域の住民が利用する施設であると言える。

どのような立場で「あーち」を利用しているか・していたかについては、「子育て中の保護者として」が90%近くを占めていた。次に多かったのは「ボランティアとして」「こども会員として」であったが、いずれも10%未満とその割合は低くなっていた。また、利用開始時の境遇を5つの選択肢を用意して回答（複数可）を求めた結果「主婦・主夫」が約75%と最も多く、次に多かったのは「フルタイムの有職者」「休職中」「アルバイト等の従事者」で合わせて約20%となっていた（質問紙では「休職中」という選択肢は用意していなかったが、「その他」の中にこの回答が集中していたため、独立したカテゴリとして扱った）。これらの結果は、再度、「あーち」の利用者のほとんどが子育て中の女性であることを示すものであるが、「フルタイムの有職者」を選択した回答者も、日中の平日に開館している「あーち」を利用できていることを考えると、育児休業中（休職中）である可能性が高いと思われる。内閣府（2010）の「平成22年度版 子ども・子育て白書」内で紹介されている国立社会保障・人口問題研究所による「第13回出生動向基本調査（夫婦調査）」における「子どもの出生年別、第一子出産前後の妻の就業経歴の構成」では、出産を機に仕事を辞めた女性が約62%、仕事を継続している女性38%となっている。回答形式が複数選択可であったことを考慮すると、「あーち」の利用者の女性も同じような傾向にあると推測できる。

回答者の家庭において、誰が「あーち」を利用しているかを尋ねた結果（複数選択可）、保護者と一人目の子どもを連れての利用が約90%と最も多く、続いて、保護者と二人目の子どもを連れての利用が約30%であった。配偶者と一緒に利用しているケースは約15%であった。つまり、夫婦ともに利用している家庭が回答者の中に一定の割合で含まれているにもかかわらず、回答者のほとんどが女性であったことになる。その理由は、パートナーと一緒に利用していても、日頃「あーち」を頻繁に利用するのが母親と子どもであるため、「あーち」に対する感想や意見を強く持っているのは母親であるためだと思われる。言い換えれば、「あーち」を利用する頻度の少ない父親は、母親ほどこの施設にコミットメントしていない可能性がある。父親が参加しやすい名称を冠したペアレンティング講座（毎月第2土曜日のみ）も提供されているが、父親が積極的に利用できるような工夫が十分なされているとは言えない。カナダの施設におけるドロップ・イン・サービスは、父親の参加を促進するため、

夜間や日曜日に開館しているところも多い。ジェンダーの視点からも、今後「あーち」においても父親参加を促進する工夫が必要だと思われる。

また、自分ひとりでの利用との回答は約10%であった。これらの人々は、そのほとんどが、「あーち」のプログラムリーダーおよびスタッフ、ボランティア、学生等である。なお、祖母・祖父の利用が5%未満と非常に少なかったことから、三世代揃っての利用はほとんど見られないと言ってよい。現状では、シニア世代は、孫を連れての利用ないしはプログラムリーダーもしくはボランティアスタッフが中心で、シニア世代が自分のためにプログラムに参加することは稀（ドロップ・インに孫を連れてきたことをきっかけに、おとなが多く参加する「書のプログラム」に参加するようになった利用者が1名のみ）である。豊かな世代間交流を通して地域のエンパワメントを実現するという観点からは、今後、シニア世代の利用促進を図る取組も必要であろう。

子どもの発達と「あーち」利用との関係については、ほとんどの回答者（約90%）は、「発達は順調だが『あーち』を利用した」を選択した。これに対して、「子どもの発達に問題がある・問題を感じている・診断や判定を受けていることと『あーち』の利用に関連している」を選択した回答者は約10%であった。この中には、発達障がい児（とその親）を対象としたプログラムに参加している親子が含まれている。

2) 利用実態についての考察

「あーち」の利用を開始した時期に関しては、回答例として「20〇〇年〇月頃から」あるいは「〇人目の子どもが〇歳を迎えた頃から」の2つを挙げておき、どちらの様式でも回答可能なようにした。結果は、質問紙の間（6）で尋ねた「利用している家族メンバーに関する情報（論文末を参照のこと）」と関連させ、「西暦」によるカテゴリと「〇人目〇歳～〇歳」というカテゴリの2種類で算出したものである（Table6, Table7）。「あーち」の開設は2005年9月であり、本調査の実施時期は2010年7月～8月である。したがって、2005年（4か月）と2010年（約8か月）は該当期間が1年未満であるにもかかわらず、「西暦」による結果を見ると、開設当初・2005年の回答者比率（16.6%）はかなり高い値となっている。これは、初年度の利用者の「あーち」に対する関心や意識が高い可能性をうかがわせる結果である。これに対し、2010年度の回答者率は6年間でもっとも低く、首肯できる値である。また、2008年が20%を超える高い回答者比率である点も特徴的である。しかし、6年間における各年の比率は、11.2%～21.2%の範囲におさまっており、本調査の回答者は、特定の年から利用し始めた人々に特に特に集中しているわけではなく、全利用者の代表的な標本となっていると判断できる。「〇人目〇歳～〇歳」による結果を見ると、「1人目の子どもの年齢が1歳から2歳未満」「1人目の子どもの年齢が1歳未満」が多く（約30%ずつ、あわせて約60%）、利用開始時期のかなり多くが、1人目の子どもの乳児期から幼児期前半であることが分かる。また、1人目の子どもを連れての利用（6歳以上は1人目の子どもがこども会員として単独で利用するので、その分を減じて再計算）が437人（76.1%）、2人以上の子どもを連れての利用（6歳以上は2人以上の子どもがこども会員として単独で利用するので、そ

の分を減じて再計算)が42人(6.5%)である。以上から、初めての子どもが生まれた家庭で、しかも、子どもが幼い場合のほうが「あーち」の存在を知って利用を開始することが多いと言える。これも、「あーち」が地域子育て支援拠点事業を実施していることと関連した結果であると判断できる。

「あーち」を知るきっかけについて、10の選択肢を用意して回答(複数可)を求めたが、「その他」の具体的記述の中にまとまったカテゴリ3つ(新聞等、通りがかり・看板等、先生等の紹介)得られたので、それらを独立させ、表中のカテゴリに加えた。友人・知人からの口コミが約40%と最も多く、一回以上利用した人からの直接的情報の効果がうかがえる結果である。次いで、区役所(乳幼児健診や子育て支援係の窓口)で情報を得たケースが約25%、「あーち」と連携している近隣の産婦人科クリニックで情報を得たり紹介されたりしたケースと新生児訪問指導の際に指導員から紹介されたケースが約10%ずつであった。このように、区役所、産婦人科クリニック、新生児訪問指導員がきっかけという回答が比較的多いのは、幼い子どもを育てている家庭が利用することの多い場やサービスと連携した広報を「あーち」が実施していることが奏効していると考えられる。さらに年齢の高い子どもの家庭の利用を促進するためには、小児科等との連携も視野に入れる必要があると思われる。

「あーち」を現在も利用しているかどうかの質問に対し、現在も利用しているとの回答は約40%、現在は利用していないとの回答は約60%であった。さらに、利用していない理由について、8つの選択肢を用意して回答(複数可)を求めたが、「その他」の具体的記述の中にまとまったカテゴリ5つ(遠方のため、成長し周囲に迷惑になった、外で遊ぶようになった、妊娠・出産したから、児童館に行くようになった)得られたので、それらを独立させ、表中のカテゴリに加えた。結果を見ると、子どもがある一定の年齢に達すると、来館しなくなるケースと、利用者自身の事情によって来館しなくなるケースとに大別できる。前者に相当する理由が「子どもが保育所や幼稚園に入園したから」「子どもが成長して行きたがらなくなったから」「子どもが大きくなり周囲に迷惑だから」であるが、最後の理由は、その被選択率が低い(約6%)ものの、誰もが利用できる施設という「あーち」の理念に反する結果である。3歳以上の子どもが乳幼児と少し離れた空間で楽しめるようなプログラムの提供などの工夫が求められると判断できる。利用者自身の事情に当たる理由は「仕事(育児休業を終えて復職も含む)や勉強のため」「転勤などによる)引っ越し」「就職や結婚のため」であるが、これらを選択した回答者の中には、ボランティア学生も含まれていると思われる。

3) 利用者の意識についての考察

利用者の意識については、4項目の質問を設けた。第一になぜ「あーち」を利用しようと思ったか(動機)(問8)、第二に「あーち」に通うことで「よかった」と思うことは何か(満足度)(問9)、第三に「あーち」でのコミュニケーションやプログラムへの参加を通して関心を高めた社会問題は何か(問13)、第四に「あーち」で声をかけられたり、障害児と遊んだり、相談に乗ったりすることへのレディネスはあるか(問14)、といった4項目である。

「あーち」を利用しようと思った理由(「あーち」利用の動機)として高い値を示したのは、「子ども連れで楽しく遊べる場所・長い時

間過ごせる場所が必要だったから」「子どもの暮らしをよりよいものにしたかったから」「子育てに関するさまざまな情報・ヒントなどを知りたいと思ったから」「社会性の発達など、子どもの発達によいと思ったから」といった項目であった。親子の日常生活に「あーち」を自律的に組み込もうとしている利用者が多い様子がうかがえる。

それに対して、中程度の値を示したのは、「子育て支援に関心があったから」「自分自身の友だちが欲しかったから」「子育てについて相談にのってもらいたかったから」といった項目であった。値が低かった項目は、低い順に「障がい児・者の自立や支援に関心があったから」「社会参加がしたかったから」「アートや音楽などの文化活動に関心があったから」「神戸大学の取り組みに関心があったから」であった。こうしてみると、どちらかというところ「わが子のため」に「あーち」を利用するようになったという傾向が強く、「自分自身のため」「自分自身の関心のため」「問題解決のため」を「あーち」利用の動機とする傾向は相対的に低いといえよう。

「あーち」を利用してよかったと思うことは何かという質問に対して、非常に高い値を示したのは、「子ども連れで楽しく遊ぶことができた」「子ども連れでゆっくり時間を過ごすことができた」の2項目であった。それらに次いで高い値を示したのは、値の高い順に「子育てに関する情報・ヒントなどを得ることができた」「子どもの暮らしがより豊かになった」「人によってそれぞれ子育ての悩みがあることがわかった」「子育てに関する同じ関心や悩みをもつ仲間と知り合えた」「子どもの社会性が発達した」「子育てに関する具体的なアドバイスをもらえた」といった項目であった。これらの項目は、「あーち」利用者の満足度の高かった項目と言い換えることもできよう。満足度は動機と同様に、「わが子のため」という基準が上位を占めているといえる。しかし、「問題解決に役立った」とことについての満足度も高い点は、動機とは異なる。動機の時点では意識化されていなかった「問題」が、「あーち」利用を通じた他者との関わりによって、「問題」を意識化しその解決を指向するようになったといえることができるかもしれない。

他方逆に、満足度が低かったのは、低い順に「自分自身も社会の役に立つことができた」「さまざまな境遇、年齢の人と相互理解が深まった」「自分のことで精いっぱいだったが、視野が広がった」「音楽やアートなどの社会活動を楽しめた」「相談にのってもらえたことで、自分の気持ちや和らいだ」「さまざまな境遇、年齢の人と知り合えた」といった項目であった。満足度も動機と同様に、「自分自身のため」という基準に該当する項目の値が低いといえよう。特に、「自分自身も社会の役に立つことができた」という点についての満足度が最低であったことは、「あーち」における利用者の社会参加促進の取り組みの不十分さを表しているとともに、子育て中の親(特に母親)が自分自身に意識を向けることが少ないことを意味しているのではないだろうか。

ただし、「とても満足」と「やや満足」という回答者数の和が、「あまり満足でない」と「まったく満足でない」という回答者の和よりも多かった項目は、「自分自身も社会の役に立つことができた」「さまざまな境遇、年齢の人と相互理解が深まった」を除く14項目中12項目にわたった。「あーち」利用者の満足度は、全般的に高い傾向を示したといえることができる。

「あーち」でのコミュニケーションやプログラムへの参加を通し

て関心を高めた社会問題として「親の子育て不安や児童虐待など子育てに関する問題」「障がい児・者がいきいきと生活するための支援」といった項目が挙げられた。この 2 項目については、「とても関心を高めた」と答えた回答者が 2 割を超え、また「とても関心を高めた」「やや関心を高めた」と答えた回答者の合計が、「あまり関心を高めていない」「まったく関心を高めていない」と答えた回答者の合計を大きく上回った。これらに、「みんなが豊かに生活するために必要な平和」への関心が高まったとする回答者が続いた。この項目には、「やや関心が高まった」の選択肢が最大値となった。子育て、障害、平和といったこれらの社会問題は、「あーち」でも特に力を入れている問題であり、「あーち」の実践の成果として評価できる点であろう。

他方、ジェンダー問題、高齢者問題、青少年問題といった項目については、関心が高まったとする回答者が、そうでない回答者を下回った。「共に生きるまちづくり」という「あーち」のコンセプトから考えると、これらの点を補強するという課題が明確になったといえよう。

「あーち」利用者の、「あーち」で声をかけられたり、障害児と遊んだり、相談に乗ったりすることへのレディネスについて問う質問では、全般的に非常に高いレディネスを示した。どの項目でも、それらのことに「あまり抵抗ない」とした回答と「まったく抵抗ない」とした回答との合計が、全体の 95% を上回った。「あーち」利用者がコミュニケーションを求めていることの表れや、「あーち」における関係形成を促進する雰囲気づくりに成功していることの表れと捉えることができよう。

4 結論

今回の調査において、「あーち」における実践の成果の一部を裏付けすることができた。「あーち」の利用動機は、子育て中の若い母親の「わが子のため」といった私的関心に基づく割合が高いが、「あーち」における他者との積極的な関わりなどによって、利用者たちの関心は公共的なものに対して開かれていき、それが「あーち」利用の満足にもつながっているといった利用者の変化の様子を読みとることができた。そうした調査結果から、社会的紐帯を形成する人々の潜在能力、また実践による社会的紐帯再生の可能性が示唆されたといえよう。

特に、「あーち」で意識的に取り組まれている実践に対応した利用者の関心（特に子育て支援の問題と障がい児・者支援の問題への関心）の変化を読みとることができる点で、実践の重要性と効果を裏付けすることができた。けれども同時に、利用者の関心の幅は限定的であるということもでき、女性の社会参加や高齢者支援の問題、青少年の問題など、関連領域に対する関心の幅を広げるためのプログラム等の工夫について改善の余地も示唆された。

また、「あーち」の利用に対する利用者の満足度が、多くの点で高かった点も、「あーち」の実践を積極的に評価できる材料となった。特に多様な人たちとの関わることが満足につながっている様子を読みとることができた点は、今後の実践の継続の根拠となりえる。

ただし、「あーち」が社会参加の機会になったと捉えている利用者が少なかった点は、実践における工夫や改善の方向性を示している。「あーち」では、利用者に対して、「あーち通信」の編集や連絡協議会での議論、プログラムのファシリテートや運営などへの参画を呼

びかけてきている。しかし、そうした呼びかけに積極的に応じる利用者はほんのわずかである。公共的な関心をもつところまでは広がる利用者の意識を、社会参加につなげることができていないのはなぜか、またどのようにしたらつなげることができるのか、といった点をさらに追究していく必要がある。

他方、「あーち」の利用者の多くは、近隣に住む乳幼児とその保護者であることが明らかとなった。この結果は、「あーち」が地域子育て支援拠点事業として神戸市から指定されていることから当然の結果ではあるが、「あーち」の理念である「共生のまちづくり」あるいは「子育て家庭のエンパワメントを目指すファミリー・リソース・センターの構築」を考えれば、利用者層のさらなる拡がりを目指した実践を考える必要がある。

利用者に満足度を尋ねた結果からは、「あーち」が地域住民に提供している機能を確認することができる。まず、利用者である保護者が子ども連れで楽しくゆっくり過ごせることに満足感が極めて高いことから、「あーち」はレスパイト機能を持っていると考えられる。また、子育て情報を得られることにも高い満足度が得られたことから、「あーち」には十分な情報提供機能も備わっていると判断できる。しかし、多様な人と知り合いアドバイスをもらったり多様な人との相互理解によって視野が広がったりするなどへの満足度は明確に高いとは言えず、「あーち」が地域の家庭や人々のエンパワメントを促進する機能までは十分に果たしてはいないと判断できる。

利用者に関する詳細な分析から、「あーち」は 2 歳未満で 1 人目の子どもを持つ家庭の利用がもっとも多いことが明らかになり、この結果は、幼い子どもを育てている家庭が利用することの多い場やサービスと連携した広報を「あーち」が積極的に実施していることと明らかに連動していた。広報の場をさらに工夫して広げることによって、より年齢の高い子どもとその保護者の利用を促進する必要がある。このように、利用する幼児の年齢幅を広げることは、「あーち」の理念と反するような理由（例えば、子どもが大きくなり周囲に迷惑だから）で利用しなくなる家庭をなくすという効果にもつながると考えられる。

謝辞

本研究の遂行は、多くの方たちのご尽力なくしては成り立たなかったが、特に歴代のスタッフとして「のびやかスペースあーち」の日常的な活動を支えてくださった尾堂裕子さん、中西美智子さん、富永恭世さん、薮本由喜子さん、佐原和美さん、芝池裕子さん、現在のスタッフである山名睦子さん、渡邊知津子さん、橘京子さん、永野郁子さんには、心より感謝申し上げます。

参考文献

- M. Mayo (2000) *Cultures, Communities, Identities*, Palgrave, 2000
- 内閣府 (2010) 『子ども・子育て白書 平成 22 年度版』佐伯印刷株式会社
- 中村健吾 (2002) 「EUにおける「社会的排除」への取り組み」『海外社会保障研究』No.141
- J. ヤング (2007) 『排除型社会』青木秀男他訳、洛北出版
- 〈「あーち」に関する主な文献〉

- 伊藤篤 (2008) 『いのちを実感し親になることを考える体験学習』プロジェクト (Ⅰ～Ⅲ) 事業評価報告書『2007 年度神戸市委託事業報告書』(Web 公開 全 143 頁)
- 伊藤篤 (2009) 「子育て支援『つどいの広場』における相談のあり方に関する一考察 ―大学サテライト施設における相談件数・相談内容の分析を通して―」『心の危機と臨床の知 甲南大学人間科学研究所編』第 10 巻、pp.5 - 13
- 神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター(2009)『インクルーシブな社会をめざす実践』(Web 公開 全 109 頁)
- 神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター(2011)『インクルーシブな地域社会創成のための都市型中間施設』
- 劉小賀、榊原久直、中村美智子、江角彩、高橋真琴、盛敏、清水伸子、津田英二 (2011) 「インクルーシブな社会をめざす実践における葛藤の積極的な意味～自閉症児のストレス表出に対する他者の反応をめぐる考察～」『神戸大学大学院人間発達環境学研究紀要』第 4 巻第 2 号
- 清水伸子・津田英二 (2007) 「インフォーマルな形態での福祉教育実践におけるデータに基づく評価枠組み形成モデル」『日本福祉教育・ボランティア学習学会年報』12 号、pp.94-115
- 高橋真琴 (2010) 「発達障がいのある子どもたちへのインフォーマルな「居場所づくり」の取り組みについて」『LD 研究』第 19 巻第 2 号、pp.157-166
- 寺村ゆかの・伊藤篤 (2008) 「妊娠期から出産後までの女性のエンパワメントを目指した実践的研究―相談・家庭訪問・地域資源を利用したアウトリーチの試みを通して―」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第 2 巻 第 1 号 pp.115 - 123
- 寺村ゆかの・伊藤篤 (2010) 「子育て支援『つどいの広場』における相談のあり方に関する一考察 (Ⅱ) ―大学サテライト施設における相談 (2007～2008 年度) 分析を通して―」『心の危機と臨床の知 甲南大学人間科学研究所編』第 11 巻、pp.71 - 78
- 寺村ゆかの・伊藤篤 (2011) 「子育て支援『つどいの広場』における相談のあり方に関する一考察 (Ⅲ) ―大学サテライト施設でのアウトリーチ・サービス構築と相談実態・内容の整理―」『心の危機と臨床の知 甲南大学人間科学研究所編』第 12 巻、pp.95-104
- 寺村ゆかの (2008) 「活動情報②大学と行政が協働したまちづくりの拠点 子育て支援施設『のびやかスペース あーち』の取組 (兵庫県)」『We Learn 女性と学習・次世代育成情報誌 財団法人・日本女性学習財団』第 660 巻、pp.10 - 11
- 寺村ゆかの (2010) 「早期からのドロップ・イン・サービス利用を促進させる手法としてのペリネイタル・アウトリーチサービス」『子ども家庭福祉学会』第 9 号、pp.71 - 78
- 寺内ゆかの (2012) 「神戸大学サテライトで提供される地域子育て支援拠点事業の評価研究―利用者を対象とした悉皆調査を通して―」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要』第 5 巻第 2 号 pp.121-133
- 津田英二 (2006a) 「地域におけるインクルーシブな学びの場づくりの可能性と課題」『日本福祉教育・ボランティア学習学会年報』11 号、pp.63-82
- 津田英二 (2006b) 「支えあう人間」ヒューマン・コミュニティ創成研究センター編『人間像の発明』ドメス出版、pp.287-320
- 津田英二 (2010) 「インクルーシブな社会をどう実現できるか」『研究紀要』(兵庫県人権啓発協会) 第 11 輯、pp.29-43
- 津田英二監修、神戸大学ヒューマン・コミュニティ創成研究センター編 (2011)『インクルーシブな社会を目指して』かもがわ出版

<アンケート>

(1) あなた(回答者)の性別と年齢をお聞かせください。
(女・男)(歳)

(2) あなたのお住まいの地域・町名をお聞かせください。
町名

神戸市灘区 ()
その他の場合()市、区、町

(3) あなたはどのような立場で「あーち」を利用していますか・利用していましたか？以下の選択肢の中から選んで✓を入れてください。いくつ選んでもかまいません。

() 子育て中の保護者として () 自分自身は利用せず、子どもだけが利用 () ボランティアとして () 相談員として
() プログラムのリーダーとして () どれも当てはまらない

(4) 「あーち」を利用しはじめた時のあなたの境遇をお聞かせください。以下の選択肢の中から選んで✓を入れてください。「その他」を選んだ場合は、その内容を具体的に記入してください。

() 学生 () フルタイムの有職者 () アルバイト、パートタイムの従事者 () 主婦、主夫
() その他(具体的に→)

(5) 「あーち」を利用したことのある又は現在も利用しているご家族についてお聞かせください。当てはまる人の箇所に✓を入れ、さらに、その人の年齢又は生年月をご記入ください。

() 「あーち」は自分一人だけで利用 () 配偶者(歳) () 1人目の子ども(年 月生)
() 2人目の子ども(年 月生) () 3人目の子ども(年 月生)
() 4人目の子ども(年 月生) () 子どもにとっての祖父(歳) () 子どもにとっての祖母(歳)

(6) 「あーち」を利用し始めた時期はいつ頃ですか？

回答例①：2008年5月頃から

回答例②：1人目の子どもが1歳を迎えた頃から

()

(7) 「あーち」をどこで、何をきっかけにして知りましたか？以下の選択肢の中から選んで✓を入れてください。いくつ選んでもかまいません。「その他」を選んだ場合は、その内容を具体的に記入してください。

() 「あーち」又は神戸大学のホームページで () ミクシーなどのサイトで () 産婦人科クリニックで () 新生児訪問で
() 区役所(乳幼児健診、子育て支援係の窓口など)で () 児童館で () 子育てサークルで () 家族・親戚から
() 友人・知人から () その他(具体的に→)

(8) なぜ「あーち」を利用しようと思いましたか？以下のそれぞれの内容について、あなた自身にどれくらいあてはまるかを、以下の4通りの回答の中から一番近いと思う番号を1つだけ選んで、○で囲んでください。

1=よくあてはまる 2=ややあてはまる 3=あまりあてはまらない 4=全くあてはまらない

1. 神戸大学の取り組みに関心があったから・・・(1 - 2 - 3 - 4)
2. 社会参加がしなかったから・・・(1 - 2 - 3 - 4)
3. アートや音楽などの文化活動に関心があったから・・・(1 - 2 - 3 - 4)
4. 障がい児・者の自立や支援に関心があったから・・・(1 - 2 - 3 - 4)
5. 自分自身の友だちが欲しかったから・・・(1 - 2 - 3 - 4)
6. 親子で長い時間を過ごせる場所が必要だったから・・・(1 - 2 - 3 - 4)
7. 子ども連れで楽しく遊べる場所・長い時間過ごせる場所が必要だったから・・・(1 - 2 - 3 - 4)
8. 子育て支援に関心があったから・・・(1 - 2 - 3 - 4)
9. 子育てに関するさまざまな情報・ヒントなどを知りたいと思ったから・・・(1 - 2 - 3 - 4)
10. 子育てについて相談のってもらいたかったから・・・(1 - 2 - 3 - 4)
11. 子どもの暮らしをよりよいものにしたかったから・・・(1 - 2 - 3 - 4)
12. 社会性の発達など、子どもの発達によいと思ったから・・・(1 - 2 - 3 - 4)

(9) 「あーち」に通ったことで「よかった」と思うことはどういうことですか？以下のそれぞれの内容について、あなた自身にどれくらいあてはまるかを、以下の5通りの回答の中から一番近いと思う番号を1つだけ選んで、○で囲んでください。

1=よくあてはまる 2=ややあてはまる 3=あまりあてはまらない 4=全くあてはまらない 0=該当しない

1. さまざまな境遇、年齢の人と知り合えた・・・(1 - 2 - 3 - 4 - 0)
2. さまざまな境遇、年齢の人と相互理解が深まった・・・(1 - 2 - 3 - 4 - 0)
3. 自分のことで精いっぱいだったが、視野が広がった・・・(1 - 2 - 3 - 4 - 0)
4. 自分自身も社会の役に立つことができた・・・(1 - 2 - 3 - 4 - 0)
5. 相談のってもらえたことで、自分の気持ちが和らいだ・・・(1 - 2 - 3 - 4 - 0)
6. 音楽やアートなどの社会活動を楽しめた・・・(1 - 2 - 3 - 4 - 0)
7. 子ども連れで楽しく遊ぶことができた・・・(1 - 2 - 3 - 4 - 0)
8. 子ども連れでゆっくり時間を過ごすことができた・・・(1 - 2 - 3 - 4 - 0)
9. 子育てに関する同じ関心や悩みをもつ仲間と知り合えた・・・(1 - 2 - 3 - 4 - 0)
10. 人によってそれぞれ子育ての悩みがあることがわかった・・・(1 - 2 - 3 - 4 - 0)
11. 子育てに関する情報・ヒントなどを得ることができた・・・(1 - 2 - 3 - 4 - 0)
12. 子育てに関する具体的なアドバイスをもたらえた・・・(1 - 2 - 3 - 4 - 0)
13. 子どもの社会性が発達した・・・(1 - 2 - 3 - 4 - 0)
14. 子どもの暮らしがより豊かになった・・・(1 - 2 - 3 - 4 - 0)

(10) お子さんと「あーち」を利用したことのある方にお尋ねします。あなたのお子さんの発達と「あーち」の利用との関係についてお聞かせください。以下の選択肢の中から、ひとつだけ選んで✓を入れてください。「その他」を選んだ場合は、その内容を具体的に記入してください。

- () 子どもの発達に順調だが、「あーち」を利用した
 () 子どもの発達に問題があると感じたことと、「あーち」の利用とは関連がある
 () 子どもが障がいの判定を受けていることと、「あーち」の利用とは関連がある
 () 子どもの発達の問題と、「あーち」の利用とは関連がある
 () この質問には答えたくない
 () その他(具体的に→)

(11) すべての回答者にお尋ねします。現在も「あーち」を利用していますか？どちらかを○で囲んでください。

(はい ・ いいえ)

→「いいえ」を選んだ方のみお答えください。その理由を、以下の選択肢の中から選んで✓を入れてください。いくつ選んでもかまいません。「その他」を選んだ場合は、その内容を具体的に記入してください。

- () 就職・結婚など生活に大きな変化があったから
 () 自分自身の仕事や勉強が忙しくなったから
 () 引っ越しをして「あーち」が遠くなった・利用しにくくなったから
 () 保育所あるいは幼稚園に子どもを通わせることになったから
 () 子どもが小学校に通うようになったから
 () 子どもが成長し、子どもが行きたがらなくなったから
 () 「あーち」のあり方に疑問を感じたから
 () その他(具体的に→)

(12) これまで「あーち」で利用したサービスやプログラムは何ですか？以下の選択肢から選んで✓を入れてください。いくつ選んでもかまいません。また、1回だけの利用でも選んでいただいてもかまいません。「その他」を選んだ場合は、その内容を具体的に記入してください。

1. おもに乳幼児と保護者向けのプログラム・サービス
 () 毎日開設している自由なひろば「ふらっと」 () 「ふらっと」での相談
 () 週に一度・火曜日の「おひさまひろば あーち」(保育士のプログラム)
 () 産婦人科クリニックと「あーち」をつなぐ助産師さんのサービスや支援 () おしゃべりほっとタイム
 2. 障がい者・児が中心のプログラム
 () 居場所づくり () ほっと () ほっとらっく
 3. 利用者がリーダーとなっているプログラム
 () ベビーマッサージ () スリング交流会 () 布おもむつ交流会
 4. 工作やお習字のプログラム
 () めだか親子クラブ () おりがみあそび () 筆をもとう () 立体の紙工作
 5. 音楽系のプログラム
 () ほのぼの音ランド () 音楽の広場 () 人形あそび () 親子わらべ歌あそび
 6. アート系のプログラム
 () らくがきおばさんがやってきた () アートセラピー () 叶うアート
 7. ダンス系のプログラム
 () よさこいダンス () らくがきダンス () からだあそび
 8. 鑑賞プログラム
 () 紙芝居 () 人形劇 () おはなしの国
 9. 保護者同士の学習会プログラム
 () ひまわりの会 () はこべらの会 () ほっと学習会
 10. 親講座プログラム・セミナーなど
 () 0歳児のパパママセミナー () 1～2歳児のパパママ交流会 () 学齢期の子どもをもつ親講座(PECC-mini)
 () ノーバディーズパーフェクト () 上記以外のセミナーや講演会など
 11. 「あーち」運営にかかわるプログラム
 () 「あーち通信」編集会議 () あーち連絡協議会
 12. () その他
 (具体的に→)

(13) あなた自身「あーち」で普段おしゃべりをしたり、プログラムに参加することで、以下のそれぞれの項目について、以前よりも興味をもてたと感じますか？以下の4通りの回答の中から一番近いと思う番号を1つだけ選んで、○で囲んでください。

1=とても興味を深めた 2=やや興味を深めた 3=あまり興味を深めていない 4=全く興味を深めていない

1. みんなが豊かに生活するために必要な平和 (1 - 2 - 3 - 4)
 2. 将来の世代も豊かに生活するために必要なエコ (1 - 2 - 3 - 4)
 3. 女性のいきいきとした社会参加 (1 - 2 - 3 - 4)
 4. 障がい児・者がいきいきと生活するための支援 (1 - 2 - 3 - 4)
 5. 高齢者がいきいきと生活するための支援 (1 - 2 - 3 - 4)
 6. 親の子育て不安や児童虐待など子育てに関する問題 (1 - 2 - 3 - 4)
 7. 不登校やいじめなど青少年が直面する問題 (1 - 2 - 3 - 4)

(14) あなたのお気持ちについて、以下の4通りの回答の中から一番近いと思う番号を1つだけ選んで、○で囲んでください。

1=よくあてはまる 2=ややあてはまる 3=あまりあてはまらない 4=全くあてはまらない

1. 「あーち」で知らない人から声をかけられるのはいやだ (1 - 2 - 3 - 4)
 2. 「あーち」で障がいのある子どもと一緒に遊ぶことに抵抗がある (1 - 2 - 3 - 4)
 3. 「あーち」で他人の悩みを聞いたりするのはいやだ (1 - 2 - 3 - 4)